

二〇二〇年度

入学試験問題

I 国 語

(五十分)

注 意 事 項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 試験問題は23ページあります。
- 3 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 4 解答用紙にマス目(例：

--

)がある場合は、句読点などそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。
- 5 終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受験番号

--	--	--	--	--

問題は次のページから始まります。

【一】 次の詩を読み、後の問いに答えなさい。

未明の馬

丸山薫

夢の奥から蹄ひづりの音が駈かけよってくる

それは私の家の前で止まる

もう馬が迎えにきたのだ

私は今日の出発に気付く

すぐに寢床はを跳ね起きよう

いそいで身仕度に掛からねばならない

ああ そのまも耳に聞こえる

彼がもどかしそうに門の扉を蹴るのが

焦いら立って 幾度も高く嘶いくのが

そして 眼には見える

霜の凍る未明の中で

彼が太陽のように金色きんの翼はを生やしているのが

問一 この詩で用いられている表現技法として適するものを次の中からすべて選び、番号で答えなさい。

- 1 直喩法
- 2 体言止め
- 3 倒置法
- 4 反復法
- 5 擬人法

問二 第三連で表現されているのは何か。最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 「彼」が何かを我慢をしている様子。
- 2 「私」が「彼」に何らかの挑発を受けている様子。
- 3 「彼」が何かに立腹している様子。
- 4 「私」が「彼」から何かを促されている様子。

問三 この詩全体で表現している内容として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 冬の早朝、幻想的な夢の中で美しい馬に朝の訪れを告げられた「私」は、何としても早く起き出さなければと気がはやっている。
- 2 深い眠りの最中何か馬の姿を借りて近づき、意識の中の聴覚や視覚を刺激するが、それは「私」をやりわりと幻の世界へ誘っている。
- 3 まだ夢から覚めないぼんやりとした意識の中で、今何かを始めるときが来たことに気付いた「私」は、希望を持って一日を迎えようとしている。
- 4 何かがすぐそばで朝の出発をせかすのを夢と現実の間で察知した「私」は、それが何だか最後まではつきりしないことをじれったく思っている。

問一 —— 1 「うき瀬を分けて中川の水」とあるが、この時作者は川音をどのように聞いているのか。その説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 以前増水した時には彼が会いにきてくれて二人は結ばれていたが、今は二人の仲を隔てるように流れていると感じている。
- 2 以前増水した時は浸水しても彼が来てくれたからいいが、今は何かあっても対応できないので不安な思いで川音を聞いている。
- 3 以前増水した時に彼が会いにきてくれたことを思い出し、今回もまた川の流れが彼を連れてきてくれるような気がしている。
- 4 以前増水した時は彼が駆けつけてくれて安心したのに、今は激しい川の流れを一人で間近に聞いていて怖い思いをしている。

問二 —— 2 「呉竹のただ少しうちなびきたるさへ」の意味として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 呉竹が数少ないながら生えているのまでも
- 2 呉竹がほんの少し揺れ動いているのまでも
- 3 呉竹がさつと頬をなでるようにするのまでも
- 4 呉竹がわずかにこちらを向いているのまでも

問三 —— 3 「いと心憂くて」とあるが、この時の作者の心情を説明したものとして最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 彼が会いに来てくれないと分かって、憂鬱のあまり死んでしまおうと思っている。
- 2 彼が会いに来ないのは人目があるからだとなり、どうしようもないと諦めている。
- 3 自分への想いの全く感じられない冷淡な彼の返事を見て、悲しくつらく思っている。
- 4 自分の想いに応えてくれない相手に、未練がましいことをしてしまったと後悔している。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

四か月ほど前、小さな北国の村に住んでいた小学生の喜代太と母と妹の久枝の三人は、無理心中をしかけるほど貧しかった。この貧しさから抜け出すために、母親は喜代太の反対を押し切って再婚した。現在、三人は義父と共に、義父が働く研究所の一面にある作業員宿舎に住んでいる。五月も末のある日、喜代太は自分たちの可愛がっていた研究所の馬が普段は餌として出ない人参を食べさせられているのを見て、その馬が翌日にでも血清を作るために殺されることを知る。その日の夜、喜代太は久枝と共に、皆が寝静まった夜に研究所から馬を連れ出した。以下はそれに続く場面である。

久枝は、Aと周囲を見まわした。光沢のある墓がかたわらに立っていて、高く組み立てられた囲いの周囲に鎖がめぐらされ、墓石の上に松の木が枝葉を形よく差しのべていた。

兄が、手綱を鎖にむすびつけると石段に腰を下ろした。久枝もその隣に腰をすえ、兄ならって近々と立っている馬の体を見上げた。馬は、耳を萎えさせ首を垂れ加減にしている。どことなく元気がなく、眼だけが無心にみひらかれている。

「あいつのこと、兄ちゃんは大嫌いなんだ」
喜代太が、馬を見上げながら強い口調で言った。

久枝は、兄の険しい表情をうかがった。あいつ、というのは、義父のことを指しているにちがいがなかった。たしかに鉄棒をふり上げていた義父の姿は、恐しかった。馬を器具にしばりつけ、血をしぼりとる間も、義父は作業の中心になって働いていた。いつもの義父からは、到底想像もできない姿だった。禿げ上った額も、いつもとはちがって赤らみ、顔中に汗が異様に光っていた。だが、その折の義父が本当の義父の姿なのか、それとも優しい眼をしている義父が本当の義父なのか、久枝にはどちらとも判断はつかない。

「こわかったね」

久枝は、兄に迎合して¹同調した。

「母ちゃんは、ばかだからあんなやつとケツコンしたんだ。母ちゃんもきらいだよ。あの時、一緒に縄で首を吊っちゃった方がずっとよかったんだ」

兄の顔がゆがみ眼に光るものが湧くのを、久枝はじっと見つめていた。東京へ出て来ておいしいものを沢山食べることができるようになったのに、兄は、お腹が痛いと言って食事をとらないこともある。義父のおかげで食物を口に入れることのできる境遇を、兄は不快に思っているのだろうか。

【不意に大きな音が静寂をやぶり、久枝の体に痙攣けいれんが走った。久枝の眼は、馬の腹部の下の土に水が激しくはねかえっているのをとらえた。土の上に泡立った水がひろがり、尿の臭いが夜気の中にまじってただよってきた。驚きが消え安堵が胸にひろがると、可笑しさが急に咽喉のどもとに突き上げてきて、久枝ははじけるような笑い声を立てた。喜代太も、肩をあえがせ笑い出した。

「驚かせるなよ」

喜代太が立って、馬の鼻柱を軽くこづいた。久枝は、また咽喉を鳴らして笑った。

「死んじゃったら、小便もしないんだ」

喜代太が、つぶやいた。

「人間っていやだな。研究所に入ってきた動物は、一匹も残さず殺しちゃうんだから。この馬だって、あのままにしていたら、血を全部しぼりとられちゃって冷たくなってしまふんだ」

喜代太の声には、笑いのひびきがいつの間にか消えていた。

久枝は、土の上に太く流れている泡立った水の動きを口もとをゆるめて見つめていた。】

「眠い」

久枝は、欠伸あくびをするとつぶやいた。気分がいつの間にかやわらぎ、体に眠気がしみ入ってきているのを意識していた。

「仕様がないな」

喜代太は、久枝の顔を見つめ、

「じゃ、どこかで寝ようか」

と言って、あたりを見まわした。

久枝は、眼をしばたいた。

喜代太は、鎖をまたいで墓石の上に這い上ると、松の枝をつかんで背伸びをした。

「あそこがいいや」

四圍に眼を配っていた喜代太が、墓石からすべり下りて馬の手綱を鎖からほどき、墓地の奥の方へ歩いて行った。

碁盤目状の墓地の路をいくつか曲ると、前方にちよとした空地があつて、そこに木造の小さな小舎が立っているのが見えた。喜代太は、そばに立っている太い木の幹に手綱をむすびつけると、ためらわず小舎の中に足をふみ入れた。一坪ほどの内部には、縁台に似た板が板壁にとりつけられていて、

隅に数本の熊手とちり取りが二個置かれていた。

「誰かが住んでいるの？」

久枝は、恐るおそる内部を見まわした。

「墓地を掃く人たちが休む所だろう。夜は、誰も来やあしないよ」

喜代太にうながされて、久枝は兄の体に寄り添った。喜代太の腕が久枝の肩にまわされて、体温が温かくつたわってきた。

月の光が、膝から下の部分を照らしていた。何気なく掌をかざすと、五本の指が鮮明な影になった。久枝は、掌を動かして影の作るさまざまな形を眼で楽しみながら、樹木の匂いのふくまれた夜気をゆつくりと吸っていた。が、それにも飽きると、眼を上げて樹の幹につながれた馬を見た。馬も月の光にさらされていて、首筋から尻の部分に注射のためにできた化膿の痕がひろがっているのがみえた。馬は、首を垂れたまま身じろぎもしない。

やがて、久枝は、馬を見つめているうちにその体が青白い月の光の中に溶け込み、自分の体も、月の光の中に膝頭から吸われてゆくのを意識していた。快い気怠さが、久枝の体をやわらかく包みこんだ。

馬が、樹の幹からはなれて典雅な足どりで歩きはじめるのを久枝は見た。久枝は、誘われて立ち上ると、栗毛の肌がつややかに光るのを見つめながらついて行く。尾が、時折り優美な形でひるがえった。

不意に浮き立つ楽の音がしてきて、久枝は、馬と遊園地の中にいた。遊戯具が遠近で華やかに動き、眼の前では、ビーチパラソルの骨に似た展望車の鉄骨が、銀色の塗料をかがやかせて B とまわっている。

馬が、展望車に歩み寄ると、パラソルの骨の先端にとりつけられた箱の中に身を入れた。馬をのせた箱が、楽の音に送られて地上をはなれ、悠長に上方へのぼって行く。久枝は、微笑を顔に浮べながらそれを見上げた。

馬は、鉄骨の頂きに達すると、再び脚を箱のふちから垂れさせて下ってくる。一瞬、久枝の胸に哀しい予感めいたものがかすめ過ぎた。馬の体が、いつの間にか箱の中に革バンドで緊縛されている。予感不幸にも適中して、楽の音が急に早まると、銀色の鉄骨の回転が速度を増した。馬の体は、鉄骨の要を中心に目まぐるしい円運動をはじめ、脚はなびき、尾がひるがえった。久枝の胸に哀しみがあふれ、泣き声もれた。その瞬間、馬の体の中から赤いものが流れ出て、あたりに散り、またたく間に銀色の鉄骨が朱色に染まった。鉄骨の回転は、それでも動きをとめない。馬の体の色素がうすれ、透き通った光沢をおびてきた。馬は、回転しながら脚をばたつかせている。その度に、透けた骨格がギヤマンのような濃淡をみせて、体の中で複雑な図を描きながら動きつづけている。久枝は、咽喉を開いて叫び声をあげた。その声で、夢が破れた。

栗毛の馬は、同じ姿勢で立っていた。眠りこむ前とちがって、体の半分以上に樹葉の濃い影が落ちていた。

久枝は、息苦しい動悸をおぼえながら小舎の中を見まわした。兄が、板壁の隅に頭を押しつけて眠っている。月の光は、小舎の中から外の土の上に移っていた。

久枝は、ようやく動悸がしずまると寒さを感じて兄の体に体を押しつけた。心細くはあったが、生れてから兄と馬とだけで生きつづけてきたような安らぎが胸の中に湧き、兄の体の温かさに気分が落ち着いてくるのを感じていた。

再び眠りに入った久枝は、今度は夢も見ずに熟睡した。

ほのかな温かさの感じられる甘い眠りだった。肩がゆすられているのに気づいた久枝は、激しい寒さを感じて眼をあけた。あたりはほの暗く、馬の姿もぼやけてみえた。

「さあ、出掛けるよ」

兄に腕をとられて、体を起した。久枝は、身をふるわせると兄に手をひかれて小舎の外に出た。

馬が首を動かし、頭をこちらに向けた。夢の中でみた馬とはちがって、眼の前の馬は薄汚れていて、そのつぶらな眼だけが濡れてみえた。

甲

久枝は、空地の隅に行くとしゃがみ込んだ。かすかな放尿の音が、土の匂いとともに久枝の体をつつみ込んだ。

墓も樹々も湿った色をみせ、馬の体も背中の上半分が夜露に黒々と濡れていた。

久枝は、馬が血をふりまいていた夢を C 思い起し、急がねばならないと自分自身に言いきかせ、喜代太が手綱をほどくの見守っていた。

馬が、喜代太の手綱にひかれて歩き出した。久枝は、馬の後ろから路を曲って夜露に濡れた土の上を歩いて行った。

広い道に出ると、喜代太が、手綱をひいた。が、意外にも馬は喜代太の導く方向とは反対の方向に首を向けた。

「どう、どう」

喜代太と馬との間に渡された手綱が強くはられた。久枝は、道の端に立って兄と馬との姿を見つめた。従順であった馬が、初めて自らの意志をむき出しにしていることが久枝にも意識できた。

馬の力は、強かった。馬は、喜代太の力を無視して歩きはじめた。かれの顔に、困惑の色が浮び、足をふんばり手綱を引きしほったが、手から綱がはなれ、馬は綱を土の上に垂らしたまま少し足を早めた。

喜代太が、うるたえて駈け出し、手綱をひろった。が、かれは手綱をつかんだだけで、馬に曳きずられて行く。久枝は馬の逞しい体に畏怖をおぼえ、² それにさからっている兄の無力な姿に気持が萎えるのを感じながら後を追って行った。

坂を下ると、踏切があった。そこを過ぎると、前方に広い舗装路が見えてきた。

「待て、待て、どう、どう」

息をあえがせた喜代太が、声をからして叫びつづけている。が、馬は、舗装路に出ると一直線に道を渡った。喜代太は、タイヤの音をひびかせてトラックが近づいてくるのを眼にして手綱をはなした。久枝が、肩を波打たせて兄に追いついた。二人は、トラックの通過するのを待ってから舗装路を駆けて渡った。

「つかまえなくちゃ、大変だ」

喜代太は、馬の入りこんで行った路を曲りながら叫んだ。ようやく久枝は、馬が昨夜通った路を引き返しているのに気づいた。

「ばかだな、あの馬は」

喜代太の声はふるえ、久枝を置いて走り、道の角から姿を消した。

久枝も後を追ったが、胸がしめつけられて息苦しく、走るのをやめた。馬は、餌が欲しいために帰るのだろうか、それとも、厩舎きゅうしやの藁わらが恋しいのだろうか。久枝は、筋肉がふやけてしまったような疲労を感じながら、虚脱しきった表情で足をひきずりながら道をたどって行った。

昨夜若い男が見下ろしていた二階が眼にとまり、久枝は、歩きながら窓を見上げた。ガラス窓は閉まり、白いカーテンが垂れ下っていた。一夜を家の外で過したことが実感となって感じられ、久枝は、母に激しく叱責される予感におびえて、小走りに歩き出した。

記憶をたどりながら路を曲り、幾つ目かの角を曲ると、久枝の眼に兄の姿が映った。喜代太は、裸電球の白々ともっている街灯の柱に肩をもたせかけ、顔だけを反対方向にねじ曲げていた。その方向には、久枝の見なれた研究所の煉瓦塀れんわへいがあつて、その一部に板の戸が半開きにひらいているのが見えた。久枝は、近づくと、

「兄ちゃん」

と、声をかけた。

振向いた喜代太の顔に、久枝は、途惑いをおぼえた。顔がひどくひきつれ、兄の顔とはちがう大人のような顔だった。

「行っちゃったよ」

喜代太は、言った。口もとに拗すねきつたゆがみがただよっていた。

³「人参にんじんが食べたかったんだね」

久枝は、兄の眼の冷たい光におびえながら首を少しかしげて言った。

喜代太の顔が、一層ゆがんだ。その顔が左右に激しく振られると、喜代太の背が街灯の柱からはなれた。久枝は、兄が足もとをふらつかせながら歩き出すのを見送った。喜代太は、煉瓦塀とは反対の方向に歩きはじめていた。

「兄ちゃん」

久枝は、顔を青ざめさせた。喜代太は、首を振りながら無言で歩いて行く。その足どりに、久枝は尋常でないものを感じたが、数歩後を追うと、足をとめた。

兄ちゃんは、一人で遠い所へ行ってしまいうちがいない。兄ちゃんは、馬もきらいになったし母もなにかもいやになってしまったのだろう。

ついで行かなくてはいけないのだ、と、久枝は、兄の後ろ姿を見つめながら自分に言いきかせた。が、久枝の眼は、煉瓦塀のくぐり戸を自然に振り返っていた。空腹感が、久枝の体に得体の知れぬ恐しさとなって湧いてきていた。塀の中には、ともかく飢えとは無縁な充足した生活がある。食物に対する激しい欲望が、久枝の小さな体を D ととらえた。

再び視線をもどすと、兄の痩せた体が板塀の角を曲るところだった。兄は、振返らなかった。久枝の胸に哀しみが湧いたが、久枝の足はかたくなに動こうとしなかった。

牛乳瓶のふれ合う音が近づいてきて、眼鏡をかけた若い男が自転車に乗って路上にあらわれ、喜代太の後を追うように板塀にそって曲って行った。

久枝は、遠ざかる瓶のふれ合う音を耳で追いながら、街灯のかたわらに立ちつくしていた。

(吉村昭『煉瓦塀』 一部改変したところがあります。)

問一 Ⅱ「またたく」の「ま」と同じ意味の「ま」をもつ名詞を次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 まあい
- 2 まつげ
- 3 まごころ
- 4 まりよく

問二 A D にあてはまる言葉として最も適するものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。なお同じ番号を重複して答えて

はいけません。

- 1 おずおず
- 2 しっかり
- 3 ぼんやり
- 4 ゆったり

問三 甲 にあてはまる三字の言葉を、文中から抜き出して答えなさい。

問四 Ⅰ「迎合して」とあるが、「迎合する」という言葉の意味として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 自分をよく見せようと必要以上に相手をほめること。
- 2 相手に取り入るために内容の伴わない言葉を使うこと。
- 3 相手の意に沿うように自分の意見や態度を変えること。
- 4 自分では考えずに行動や判断の決定を相手に任せること。

問五 〔 〕部の場面の説明として、最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 義父に対する考えが兄と違うために緊張していた久枝だが、馬の放尿によってその緊張が解けてつい声を立てて笑った。一方で、喜代太は自分を驚かせた馬への愛情から、死についても考えるようになった。
- 2 夜の墓場で緊張していた久枝は不意をつかれて驚くが、馬の放尿とわかり安堵して大笑いした。一方で、喜代太は驚いて笑うだけでなく、死や人間という存在についてまで考えを巡らせていた。
- 3 他者からの施しを受けるくらいなら死んだほうが良いと考えている一方で生き物を殺すことを嫌悪する喜代太は、馬の放尿でつい笑った妹とは違い、命の尊厳についてまで考えていた。
- 4 馬の放尿くらいで大笑いするほど幼い妹の手前、喜代太はこれまで兄として不安を表に出せなかった一方で、馬の放尿に怖気づいた恥ずかしさを隠すそうと大人びた意見を口にした。

問六 〔 〕2「それにさからっている兄の無力な姿に気持ちが萎えるのを感じ」とあるが、この久枝の心情を五十字以内で説明しなさい。

問七 〔 〕3「人参が食べたかったんだね」とあるが、この久枝の発言を聞いた後の喜代太の説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 途中から自分の支配を超えてしまった馬によって自分の小ささを痛感した喜代太は、久枝の発言を子供じみたものとして否定しつつ、わざわざ研究所に戻った馬の思いが腑に落ちないでいる。
- 2 可愛がっていた馬を救えずに挫折感を抱いていた喜代太は、死の恐怖を簡単に乗り越えてしまう欲望の存在に衝撃を受けつつも、そのような欲望の存在を語る久枝の発言に納得できかねている。
- 3 助けてやろうとした馬が自分から逃げてしまいあきれている喜代太は、人参を食べたかったはずがないと久枝の発言を受け入れられない一方、一晩中馬と歩き回っていた徒労感に包まれている。
- 4 たとえ人参を食べたいとしてもわざわざ研究所に戻ってしまった馬に落胆した喜代太は、結局は馬を助けられなかったという無力感を抱くと同時に、自分は馬と同じ様には行動しないと考えている。

問八 ——— 4 「久枝は、兄が足もとをふらつかせながら歩き出すのを見送った」とあるが、この後の久枝の説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 久枝は何もかも嫌になって一人出ていこうとする「兄」について行かなければならないと考えている一方で、飢えに対する恐怖感から久枝の体は動けないでいる。
- 2 義父はもとより馬も母も嫌う「兄」の孤独を救うことが出来るのは自分しかいないと考える一方で、頼りない「兄」と一緒に行動することに疑念を抱いている。
- 3 馬を逃がすことを大義名分に家出するという「兄」の目論見が崩れたことを残念に思う一方で、その目論見が崩れた今、独力でどうすべきかを考え出している。
- 4 物事が思いどおりにならなかったためになげやりな行動をとる「兄」に同情する一方で、その様な「兄」と共に生きていくことを否定的に捉えている。

問九 本文について以下の生徒たちが感想を述べあっている。本文の感想として当てはまらないものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 Aさん…夢と現実を混在させたり時系列をあえて無視したりした描写のために、幻想的な印象を受けました。
- 2 Bさん…久枝の視点によりそって語られた世界であるため、喜代太の心情を客観的に把握することは難しいね。
- 3 Cさん…「音」が効果的に使われ、特に最後の場面における「音」が遠ざかる描写は兄妹の別れを示唆していると言えます。
- 4 Dさん…自分の思いと現実とのギャップに苦悩する喜代太と、生きていくために現実的な判断をする久枝とがうまく対比されていましたね。

問題は次のページから始まります。

【四】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

制服というと、ふつう「不自由」の代名詞のように言われる。規律による拘束のしるし、画一性と没個性のしるしだというわけだ。じぶんがだれなのか、それをつかまえないとおもい、服を取り替えたり変形したりして、じぶんのイメージをぶるぶる揺さぶるとき、まずは押しつけられた制服に抵抗するというかたちでそれをはじめのもの、同じ理由による。

制服のこういう面について考えるとき、いつもおもいだすのが金子光晴の「さくら」という詩だ。この詩が書かれたのは、戦時中、「ぜいたくは敵だ！」というスローガンを掲げて、婦人運動家たちが身だしなみの「自粛」運動を展開しはじめたころだ。念を押しているという、男性ではなく女性たちが、である。一九四〇年の奢侈品等製造販売制限規則（商工・農林両省令）の公布後、婦人団体を中心にした贅沢全廃運動委員会のメンバーが、奢侈品の使用まで先の法律で禁止されているわけでもないのに、進んでこれらの使用禁止を謳い、検閲と摘発の運動を街頭で展開したのだった。華美な服装の「自粛」以外にも、結婚式や葬儀に際する酒食・香典返しのカンソ化や、飲酒・喫煙の節制、弁当の携帯、電気の節約（たとえばネオンの自粛）などを強く奨励した。そして「街頭に無駄を捨てる日」と称し、電灯のつけっぱなしや水道の流しっぱなしを摘発しに街に出たのだった。

A、このキャンペーンのなかで「廃止すべき服装」として挙げられたのは、原色を三色以上使用したもの、極端に大柄なもの、真夏のシヨール、羽織、手袋、高価で華美な帯留め、ブローチ、ハンドバッグ、髪飾り、きわだつてかかとの高いハイヒール、ゴールドの装身具であり、さらに「禁ずべき化粧」として挙げられたのは、アイシャドー、マニキュア、パーマメント、口紅、めだつ頬紅であった。

いまどきの生徒テチョウには、どのくらい細かく服装規定が書いてあるのだろうか。座ったときにスカートの裾が十センチ以上床についていること、などといったアブナイ注意はまさかなくともおもうけれど。

B、先生用にも、プライベートな時間に着るべきジャージーのゆるゆるの服は公共の場（教室のこと）には不適切でありブレイであること、同じ理由でかかとのないゴム・サンダル——かつて「モード履き」と呼ばれた！——は厳禁（そんな緊張感のない姿のひとが目の前にいると、気分がだらけて「学業」に身が入らない）、といった事項も入れておくべきだ。ほとくの友人は日曜日、父親参観日だということ、めったに着ない背広を着て、ネクタイ締めて小学校の教室に行ったら、担任の先生がジャージー姿で授業をやっている、カーツとなって、それはないだろうと詰問したのだそうだ。むかしの先生はきちんと背広を着ていた。チョークで汚れるというひとは、上に白衣を羽織っていた。

はなしがちよっとそれてしまったが、その後運動家たちは婦人挺身隊なるものをヘンセイし、贅沢排除のための監視運動をエスカレートさせていった。そして、「華美な服装はつつしみましょう。指輪はこの際全廃しましょう（東京市各種婦人団体）」と書かれた警告票を街ゆく女性たちに配ることに

なる。パーマメントをかけ、ルージユを引き、派手なショールを羽織った女性が通りかかろうものなら、引きとめて激しく糾弾する。「自発的」になされる摘発運動によくみられることだが、嗜虐の快楽を密かに混入させた暴力が、路上で、それこそともアンファッショナブルな人たちによってどれほどヒステリックに行使されたかを想像するのは、そんなにむずかしいことではないだろう。

そのようなときだ、金子光晴が「さくら」を詠んだのは。雨に打たれ、道端で泥にまみれた桜の花びらのように幸薄い女たちが、戦争が始まったとたん「軍神の母、銃後の妻」としておだてられ、「さくらは、みくにのひとごころ」などと体よくもち上げられる。そういう時代に金子光晴は、「水仕事、ぬひ針、世帯やつれて、／あるひは親たちのために身うりして、／あるひは愛するがゆゑに却いて、／あきらめに生きる心根のいちらしさ」に思いをはせ、「ふまれたさくら。／泥になつたさくら。」でしかない女たちに向かって、次のように歌ったのだった。

さくらよ。

だまされるな。

あすのたくはへなしといふ

さくらよ。忘れても、

世の俗説にのせられて

烈女節婦となるなかれ。

ちり際よしとおだてられて、

女のほこり、女のよろこびを、

かなぐりすてることなかれ、

バケツやはしごをもつなかれ。

きたないもんぺをはくなかれ。

はじめはぼくらを真綿のようにふんわりと包み、酸欠状態をへて、ついにはぼくらを窒息死させてしまう、「自粛」という名の自己検閲と相互監視のシステム。ちょっと前だと、昭和天皇が病床にあったときの全国一斉の「自粛」（歌舞音曲の自粛といいつつ、同時に「下血」などといったあまりに即物的なことばで病状が報道されていた）、そしてつい先ごろは湾岸戦争時の海外旅行の「自粛」というふうには、「日本」という国では、ひとは、ことあるごとに、この被虐的なメンタリテイに進んで埋没してゆくものらしい。そしていったんそちらに流れだすと、すぐさま攻撃に転じ、あたりにきびしく目を光らせて、それに従順でない者を詰問し、告発しはじめるのは、いま「ぜいたくは敵だ！」キャンペーンで確認したとおりだ。

けれども、⁴ぼくらはけっして「身分相応」の、飼い馴らしやすい存在になつてはいけない。ほどほどのサイズ、人あたりのよいイメージのなかにすっぽり自分をはめこみ、そこで安眠を決めこんではいけない。つつましくおさまりきつた（わたし）をたえずぐらつかせ、突き崩すこと。そう、じぶんの存在がちぐはぐであるという負の事実を、ぼくらの特権へと裏返さなければ……。ちぐはぐであるということは、じぶんの存在がちがちにまとまっていなくて、むしろじぶんのなかにじぶんをゆるめたり、組み換えたりする「あそび」の空間があるということなのだ。そして、かつて九鬼周造が『をりにふれて』という瀟洒な随筆集のなかで書いていたように、できあがった「わたし」ではなく、「私が生れたよりもつと遠いところ、そこではまだ可能が可能のままであつたところ」までいつでも一挙に引き返せる準備をすることだ。

そのためには、その存在の表面に張りをもたせておかねばならない。いつもじぶんの表面に最大限の張力を保っておくこと、これがファッションの原則だ。優等生に、模範青年に、ならなければいけないというプレッシャーをふとじぶんのなかに感じたとき、言いかえると、何をあせっているのかじぶんでもわからないまま、まとまろう、まとまろうとしはじめるときに、そういうじぶんの底の底から廃棄する用意ができていく。いつも一からそっくりやりなおす準備をすること。「等身大」あるいは「身分相応」という観念を遠ざけること。だれが言い出したのかわからないような観念がちがちにならないで、肩から力をぬいて、じぶんというものをいつも組み換え可能に、フレキシブルにしておくこと。まちがっても「きたないもんぺをはくなかれ」。これが金子光晴がぼくらに送りとどけてくれたメッセージだ。

（鷺田清一『ちぐはぐな身体——^{からだ}ファッションって何？』一部改変したところがあります。）

問題は次のページから始まります。

問一 —— あくおのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 本文中の

A

 ・

B

 に入れる語として最も適するものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

- 1 つまりは
- 2 けれども
- 3 それなら
- 4 もっとも
- 5 ちなみに

問三 —— a・bの意味として適するものを次の中からそれぞれ選び、番号を答えなさい。

a スローガン

- 1 普段自分が行動する上で心がけているもの
- 2 理念や目的を短い文句で言い表したもの
- 3 比喩を用いて教訓や風刺を人に諭すもの
- 4 人々の感情や偏見に訴えて力を得るもの

b 念を押す

- 1 特別に目をかけてひいきをすること
- 2 重ねて注意し何度も確かめること
- 3 ある事柄を深く記憶し忘れないこと
- 4 たいしたことはないともくびること

問四 —— 1 「『自粛』運動」について筆者は日本における「自粛」をどのようなものとしてとらえているか。最も明確に述べられている部分を文中から十五字以内で抜き出さない。

問五 —— 2 「アブナイ注意」とあるが、なぜ作者はこのような表現を用いるのか。その説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 戦前と変わらない愚かな行為への怒りをカタカナで表記し、極端な長さの裾は衛生上も好ましくないと考えるから。
- 2 生徒にばかり細かいルールを適用させておいて、規定する側の教師の服装はひどく乱れていることは公平ではないから。
- 3 明らかに異常な規則への皮肉を表すとともに、人々の個性が著しく抑圧されることに対しては危機感を覚えるから。
- 4 服装規定を厳重化することの背後に、規定される側の暴力的な意図を読み取ることができ、教育へ不安を持つから。

問六 —— 3 「金子光晴が『さくら』を詠んだのは」とあるが、金子光晴の詩「さくら」についての以下の問いに答えなさい。

i この詩の中で「さくら」として詠まれているものはどのような存在か。その説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 集団の観念に押し流されてしまい本来の自分とは違う役割を演じ続けることを強いられ、後世にはヒステリックな婦人運動家と批判されたや
るせない運命の女性たち。

2 戦争によって夫や子供、家族を奪われ女性としての人生をほんろうされてしまい、雨に打たれ、道端で泥にまみれるほどの悲惨で落ちぶれた
生涯を送った女性たち。

3 「ちり際よし」と体よくもち上げられることなく、自らの信念に従い婦人運動に力を注いで街頭で活躍したものの、戦後には全てを否定され
てしまった幸薄い女性たち。

4 戦時中の「軍神の母、銃後の妻」といった俗説におだてられて、女性としての喜びやほこりを感じることなくやつれ、あきらめの中で生きる
しかない不幸な女性たち。

ii 詩「さくら」に関する説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 詩「さくら」は語りかけるようなスタイルをとって、自分を失ってまでも世の中の流れにこびる必要はなく、むしろ抵抗することで自分らし
さを持ち続けることの大切さを表現している。

2 詩「さくら」は「バケツ」や「はしご」という日常的な生活空間にあるものを細かく詠み込むことによって、作品のテーマである「日常生活
からの離脱」を具体的に表現することに成功している。

3 「あすのたくはへなし」という表現は当時の人々が戦争によって物資が欠乏した状態を表しており、戦争を肯定してしまう当時の世相への詩
人ならではの批判を読み取ることができる。

4 詩「さくら」は「だまされるな」や「くなかれ」といった命令調の言葉を用いることで、詩人のように人に強制することはやめよう、という
決意を読者にうながす矛盾した効果を出している。

問七 —— 4 「ぼくらはけっして『身分相応』の、飼い馴らしやすい存在になってはいけない」について、なぜ筆者はこのように考えるのか。その説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 人あたりのよいイメージに飽き足らずに従来の自己を突き崩していくことは苦しい行為だが、結果として被虐的なメンタリティから脱出して特権的な自己を確立するから。

2 自分が生きている意味を考えることは苦悩に満ちているが、同時にそれは少数者としての価値を持ち、現代日本における個人の生き方に一石を投じることができるから。

3 飼い馴らしやすい存在でいることは安心できることだが、そのような「自粛」によって形成された自己には自分らしさを保証してくれる「あそび」の要素が一切ないから。

4 自分の存在がちぐはぐであるという状態は不安をとまなう状況だが、それは同時に組み換え可能で柔軟な自己を発見する機会が常に自分の中に存在している状態でもあるから。

問八 —— 5 「ファッションの原則」について、筆者はどのようなものと考えているか。その説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 意識の表面にいつも張りを持たせることによって、自分を圧迫する様々なイメージから自己を守り、なおかつ攻撃的な他者との円滑なコミュニケーションをも確立してくれる考え方。

2 自分を感じがらめにしてしようとすると観念に支配されそうになったとき、そういった観念にとらわれないで、様々な可能性を持った自己存在を維持するために備えておくべき態度。

3 戦時下の日本のような「自粛」の嵐が吹き荒れたときでも、自分を無限に変化可能な衣服で包み込むことによって、自分らしさを失わないようにする変わることのない強い計画。

4 小さな存在としてまとまろう、周囲に合わせようという欲求に対して、そういった欲望のすべてを廃棄し、ほかの誰とも似ていない大きく個性的な自己認識を形成してくれる方法。

問九 Ⅲ「制服のこういう面」とあるが、本文で「制服」とはどのようなものとして述べられているか。次の条件を満たすように答えなさい。

「制服」はAである一方、Bであるもの。という形になるようにA・B部分を答えなさい。なおAは十五～二十字、Bは四十～五十字で答えなさい。

(問題は、これで終わりです。)



